

# 人參養榮湯

原典

『和劑局方』卷五 (1107-1110、裴宗元・陳師文、宋)

『太平惠民和劑局方』 (1151、許洪 校訂、宋)

『太平惠民和劑局方』 (1241-1252、宋)

中国医学史上初めて国家によって頒布された薬品の専門書、方剂配合の手引き書で、同書の編集作業は1078年(宗時代)に「売薬所」で使用されていた処方集を底本として開始された。その後度重なる編纂を重ね1241-1252年に編纂された『太平惠民和劑局方』が現在に伝わっている。

○淳祐新添方

人參養榮湯

治積勞虛損四肢沈滯骨肉酸疼呼吸少

氣行動喘噎小腹拘急腰背強痛心虛驚悸咽乾唇燥

飲食無味陽陰衰弱悲憂慘戚多卧少起久者積年急

者百日漸至瘦削五藏氣竭難可振復又治肺與大腸

俱虛咳嗽下利喘乏少氣嘔吐痰涎

白芍藥參兩 當歸 桂心去麋皮

甘草炙 陳橘皮 人參

白朮煨 黃耆各壹兩 熟地黄製

五味子 茯苓各半 遠志炒去心

右剉散每服肆錢水壹觔半生薑參片棗子壹枚壹本

煎至茶分去滓温服便精遺泄加龍骨壹兩壹本

阿膠甚妙

『万病回春』発熱(龔廷賢)

発熱

脈 經に曰く、脈大にして力なきを陽虚となす。脈数にして力なきを陰虚となす。力なきを虚となす。力あるを実と曰う。

夫れ発熱は、謂る怫怫然として皮膚の間に発して則ち熱をなす。潮熱、寒熱とは、同じきがごとくにして異なる。潮熱は、時あつて熱し、其の時を失せず。寒熱は、寒已んで熱相繼いで発る。発熱に至つては、則ち時なくして発る。

血虚 汗あり、潮熱するには、

○人参養榮湯 積勞、虚損、四肢倦怠し、肌肉消瘦して顔色少なく、汲々として短氣し、飲食味なきを治す。

人参(蘆を去る)、当帰(酒にて洗う)、陳皮、黄底(蜜にて炙る)、桂心、白朮(蘆を去る)、甘草(一錢、炙る)、白芍(酒にて炒る、二錢)、熟地黄(酒に浸す)、茯苓(皮を去る)、五味子(各七分半)、遠志(心を去り、炒る、五分)。

右剉み一劑。生姜三片。棗二枚。水二鍾にて煎じて一鍾に至し、食遠に服す。

『衆方規矩』(曲直瀬道三、1507-1594)

- 1) 人参養榮湯<sup>①</sup>は、大病の後に正氣が疲れて心神恍惚となり、面色が悪く、しばしば忘れ、しばしば臥すものを治す。
- 2) 咳嗽には阿膠を加える。精が泄れるものには竜骨を加え、発熱には地骨皮、牡丹皮を加える。思うに、氣血が虚して諸症に變ずるものには、その症(証)を問わず、脈を論ずることなく、ただこの湯を用いれば諸症ことごとく退き、その効甚だ多し。

[1]

①人参養榮湯(にんじんようえいと)この処方には、陳皮がなく、生姜、大棗があつて13味。

『方読弁解』(福井楓亭、1725-1792)

- 1) 人参養榮湯は、脾肺ともに虚し、発熱惡寒、四肢倦怠、肌肉消瘦、面黄、短氣、食少、瀉をなし、氣血虚するがごとくして名状しがたい變化に富んだ諸症をあらわすものを治す。また梅瘡で頭痛あるいは羸瘦し、久しく癒えぬものに驗がある。
- 2) この方は虚勞で熱があつて咳し、下痢のあるものを目標として用いる。『和劑局方』の人参養榮散<sup>②</sup>も虚勞の下痢に用いるが、人参養榮湯に比べると少しく実証のものによく、参考して用いるべきである。人参養榮湯は方中の芍薬を君薬とし、真武湯におけるそれと同じで水氣を逐い、遠志が虚を補う。またこの方は健忘などにも用いる。

[3]

①人参養榮散(にんじんしゃさん)：芍薬、茯苓、蒼朮、三稜、青皮、乾姜、人参、丁香、甘草、大棗、生姜の11味(和劑局方)。

1) 毛髮枯槁とは、毛の潤いがぬけ、赤く縮んで艶なく、甚だしいものは頭髪も眉毛なども抜け落ちて無くなり、爪なども色つやなく潤いが取れ、もろく乾いて折れやすくなり、また全身も潤いが抜けて、古い渋紙にさわるようにこそつくものである。このような症は、すべて身体に血のけがないためで、これを毛髮枯槁とも脈極の症ともいうのである。

この症には黄耆建中湯か人参養榮湯が正面の方である。この2方は、毛髮が抜けやすく、色が赤くなるのを目標に用いるのに至極適切な方と心得るとよい。虚勞をはじめ、そのほか女性ならば産を多くした人、男ならば痔などを久しく患って血を多く下した人、また痢病の後あるいは大きな腫物を患った人、腎虚の人、朝夕に弱い人など、このような人が長病にかかった時は、まず髪毛、眉毛、爪などをよく気をつけて見るべきである。もしこれ等の部分や身の潤いに異常が認められたならば、それは脈極の症に違はなく、上記2方の何れかを選用すれば間違いなく妙効を得ることができる。なお「脈極」という名についてであるが、この場合の「脈」の字は手などの「脈」と考えてはならず、「血すじ」と解釈すべきであり、また「極」は至極の意である。したがってその意味は「身中に行き通うべき脈が至極虚する」ということで、血道の乾涸した症を「脈極」の症というのである。

2) 人参養榮湯を諸病に用いる目標は、第1に「毛髮脱落」、第2「顔色無沢」、第3「忽々健忘」、第4「只淡不食」、第5「心悸不眠」、第6「周身枯淡」、第7「爪枯」、第8「筋涸」、以上を人参養榮湯目標の8症という。

3) 黄耆建中湯は張仲景の方で、人参養榮湯、十全大補湯、帰脾湯の類は皆後人が仲景の黄耆建中湯に倣って組立てた変方である。したがってその使用目標もほぼ同じであるが、3方それぞれに多少の区別はある。すなわち人参養榮湯は「津液の枯竭」、十全大補湯は「気血の虚寒」、帰脾湯は「心脾の血虚」を目標とし、これが3方の区別である。

4) すべて「気血」を調補する諸方の役割は次のように心得るとよい。すなわち四物湯は「血虚」の方、四君子湯は「気虚」の方、八物湯<sup>①</sup>は「気血両虚」の方、十全大補湯は「気血の両虚に寒を兼ねた」方、帰脾湯は「心脾血虚」の方、人参養榮湯は「津液枯竭」の方である。この心得で諸病に臨めば、大きな間違いはない。

5) 血と津液との区別であるが、「気」「血」「津液」の3つが人身にあることは、これを豆腐に例えるならば豆腐は肉である。この豆腐を握って絞ると濁った水が出るが、これは「血」である。ただ握るだけのときは清水が出るが、これは「津液」である。また豆腐の形を四角に保って崩れないのは、その潤いが豆腐全体に満配<sup>まんぱい</sup>配られているからで、これが「気」である。

したがって「気」「血」「津液」の3者は一体のものであり、これが分かれ分かれになると病になるのである。このように考えれば津液は血のうわ澄みで、人の汗は肉にあるときは血であるが、汗となって外に出るときは清水である。また歩行してできたため、また氣腫、瘰癧

Handwritten red mark.

脾肺  
津液  
呼吸器

[4]

①八物湯(はちもつとう): 八珍湯ともいう。四君子湯、四物湯の合方(元戎)。

の類は、真の膿ではなく黄水のみが出るが、これは血の浮澄で「津液」である。また麻黄湯で大汗を取り過ぎて表気が虚するのを「亡陽」というのも、血の浮澄の津液を亡<sup>うしな</sup>ったことの名前で、これが津液の弁である。

人参養栄湯、黄耆建中湯の2方はこの「津液」の枯竭を補益する処方であり、したがってその使用目標も毛髪、眉、肌、爪、筋の潤いが抜けたものとし、血分の虚は二次的な目標にして用いるのである。人参養栄湯は「津液枯竭」の方と承知することである。

- 6) 健忘で、心気不足して見聞を忘れ、心悸跳動、恍惚不定のものは千金伏(菝)神湯<sup>②</sup>、思慮過度で健忘するものは帰脾湯、痰があれば竹瀝、姜汁を加え、精神短少のものは人参養栄湯で遠志丸<sup>③</sup>を送下する。

【4】

②千金茯苓湯(せんきんぷくじんとう): 茯苓, 茯苓, 人参, 菖蒲, 赤小豆の5味(千金).

③遠志丸(おんじがん): 遠志, 石膏, 茯苓, 茯苓, 人参, 竜齒, 朱砂の7味(济生方).

### 『方彙口訣』 (浅井貞庵、1770-1829)

人参養栄湯も名高い薬で「脾肺ともに虚する」というのが目標である。十全大補湯、帰脾湯、匡王湯(補中益気湯)、八物湯の類は、皆「脾肺の虚」を目標にして用い、「心肝」の不足ではなく「脾肺の虚」である。これらの処方を考え併せて活用するとよい。この人参養栄湯などは「血虚」「気虚」共に用いてよい処方であり、十全大補湯や帰脾湯の手が届かないところを世話し、助けてゆく薬である。

その症はというと、寒熱があつて四肢が疲れ、肌は瘦せ、面は黄で、短気し、食少なく、腹は下るというものに用いる。また外科が必要とする方で、腫物が膿を持って虚し、疲れのあるものに妙効があり、「虚勞」に属するものには等しく用いられるものである。

本方の芍薬は、手足太陰の気を補い、酒に浸せばまた気の運りをよくする。人参、白朮、黄耆、当帰、陳皮などは、匡王湯の薬味であつて血気を補い、その中の陳皮で胸の気を開き、さらに五味子は肺の津液が洩れないようにするもので、これは人参や黄耆と組めば肺を補うという用い方である。また遠志によって心気を静にし、これは大体において心部の薬であるが、下で脾肺が虚すると、上で心気が浮つくもので、それ故に上では咳、下では下りがあるというものには五味子と茯苓を組むということである。とにかくこの方は「気血の虚」で、地黄、黄耆、人参などを用いた時に、心部の症があれば用いてよいという処方である。そもそも脾と肺は営血の出来るもとであるので、この方名となったものである。またこの方中に升提の薬もなく、川芎もなく、帰脾湯における木香、酸棗仁、竜眼肉もないという意味を考えるとよい。

この方はまた腫物で肉のあがらぬもの、皮が入れ合わぬというものによく、また傷寒、大病で食が攝れぬ、精液が乏しいというものに用い、神気の抜けたもの、血気が泄れるといったものによい。

### 『内科秘録』 (本間棗軒、1804-1872)

- 1) 久しく勞を患って飲食を欲しないものは補中益気湯がよく、気血の虚したものは人参養栄湯を用いる。
- 2) 吐血の後、黄胖<sup>①</sup>に変わるものは連珠飲<sup>②</sup>に鎮悸丸<sup>③</sup>を兼用し、虚勞を催すものは人参養栄湯がよい。

【9】

①黄胖(おうはん): 鉄欠乏性の貧血。

②連珠飲(れんじゅういん): 苓桂朮甘湯合四物湯(自準)。

③鎮悸丸(ちんきがん): 綠礬, 茯苓, 朮, 桂枝, 甘草の5味(自準)。

## 処方構成

地黄4、当帰4、白朮4、茯苓4、人參3、桂皮2.5、芍薬2、遠志2、陳皮2、  
黄耆2、甘草1、五味子1 (12品目)

## 方意

八珍湯(四君子湯+四物湯)の川芎を除き、黄耆・桂枝・五味子・遠志・陳皮を加えたもの

十全大補湯の川芎を除き、五味子・遠志・陳皮を加えたもの。

補気補血、鎮静、去寒、鎮咳

温清飲の使った人  
日市月寧

## 処方解説

気血両虚が続き、脳の興奮過程と抑制過程の両方の機能低下や呼吸器系の機能低下および循環不足が発生したもの。四君子湯加黄耆で、機能・代謝・脳の興奮性・免疫能を促進し、四物湯去川芎で滋養強壯し、桂枝で循環促進し虚寒を除く。五味子は中枢神経系の興奮過程の機能を高めると共に、抑制過程を強めて脳の興奮性を調整し、かつ鎮咳、去痰、抗菌に働き、止汗の効果ももつ。遠志は精神安定と滋潤に働き、かつ去痰の効果がある。陳皮は蠕動を促進して他薬の消化吸収をつよめ、去痰する。

人參養榮湯  
処方

## 証

舌質：淡白、脈：沈細弱

## 臨床例

『衆方規矩』(曲直瀬道三、1507-1594)

ある人が傷寒を患って癒えた後、眉髪が脱落し、面色が悪く、杖に頼らないと歩行できない状態が1年余り続いた。私が入参養榮湯を与えると、20余貼で毛髪が生じ、歩けるようになり、50貼を服して本復した。

『橘窓書影』(浅田宗伯、1815-1894)

1)ある妻女が外感を得て、たまたま経水があり、経断のあと熱がますます熾んとなり、人事不省、譫語、模床、時に撮空し、腹虚濡、舌上は黒苔を生じて乾燥した。升陽散火湯<sup>①</sup>加生地黄を投じ、2~3日は変らなかつたが、ある夜煩燥して狂状を呈し、脈数急となった。蓄血として桃核承気湯を与えると、黒便を2行下し、狂躁はやや安静になった。後に小便不利してまた煩悶を生じたので、猪苓湯加大黄を与えると小便が利し、精神もやや回復した。そのあと小柴胡加地黄湯<sup>②</sup>を与えて血熱は全解したが、羸瘦骨立して身体が餓鬼のごとく、氣息奄々となったので、『和劑局方』の人参養榮湯を与えると漸く常に復した。私は「熱

血室に入る」患者を数十人がけたが、未だかつてこのような劇証を見たことがない。恐らく当初の治を誤って深入りしたものであろうが、傷寒中の行経および妊娠中の傷寒は、医師が機に応じた治を施すべきで、漫然たる対処で治を誤ってはならない。

- 2) 14歳の少女が、初潮のあと小便淋瀝して痛みに堪えず、甚だしい時は尿血が出る。竜胆瀉肝湯を与え、乱髮霜、蜜蠟の2味を丸にして兼用すると、淋痛はやや治まった。ところが身体がやせ衰え、脈数、発熱、咳嗽して、全く勞瘵のような症状となった。『回春』黄耆湯<sup>③</sup>、補中益氣湯加五味子、麥門などを与えても全く効がない。そのうちに患者は消穀善饑して、2人分を食してもなお足らず、小腹が凝結して不大便となること7～8日、激怒して家人をののしり、器物を投げつけた。私は瘀血があるのを知り、断然として桃核承氣湯を与えると、服すること5～6日で大便が潤下し、小腹が柔らかくなって狂状が大いに収まった。よって温經湯を与え、さらに病状はよくなったが、そのあと精神恍惚として痴呆状態となり、寢食も忘れたので、人參養榮湯を与えると数旬にして常に復した。

③回春黄耆湯(かいしゅんおうぎとう): 人參, 炙甘草, 黄耆, 芍薬の4味(回春)。但し浅田の方函では「直指小児」黄耆湯となっており、薬味が異なる。

## 適応

貧血症、慢性肝炎、慢性腎炎、その他の慢性疾患、産後、出血の後、<sup>12歳以下</sup>肉芽形成不全、自律神経失調症、肺結核、慢性気管支炎、不眠症。

## 参考文献

- 1) 『太平惠民和劑局方』 (1241-1252、許洪、宋)
- 2) 『万病回春』 発熱 (1587、龔廷賢、明)
- 3) 『衆方規矩』\* (曲直瀬道三、1507-1594)
- 4) 『方読弁解』\* (福井楓亭、1725-1792)
- 5) 『療治経験筆記』\* (津田玄仙、1737-1809)
- 6) 『方彙口訣』\* (浅井貞庵、1770-1829)
- 7) 『内科秘録』\* (本間棗軒、1804-1872)
- 8) 『橘窓書影』\* (浅田宗伯、1815-1894)
- 9) 『中医処方解説』 (神戸中医学研究会 編)
- 10) 『中国医学の歴史』 (傅維康 編、東洋学術出版社)
- 11) 『古医書における漢方の使い方』 日本医師会雑誌、第106巻・第8号、第9号 (長谷川弥人、大塚恭男、山田光胤、菊谷豊彦)